
日の翳らない影の世界

秋乃時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日の翳らない影の世界

【Nコード】

N5194E

【作者名】

秋乃時雨

【あらすじ】

戯れる影を背に、少年はただ十字路を歩き続ける。隔離された別の世界のような、影しかない場所。ただ延々と同じことを繰り返すだけ。ただそれだけの話。

後ろにいる影

後ろに自分と違う影が自分の影に重なっていることに気づいた。後ろをずっと一定の距離を置いて着いてくる影がいた。

頭の上の木の上から自分を見下ろす影に気がついた。

さっき通った道の脇から顔を出してこちらを見る影がいる。

自分の横を歩く影がいた。

塀に張り付いて着いてくる影がいる。

手を伸ばして捕まえようとする影がいる。

腕を振る影がいて暴れる影や二人手を繋いでいる影がいて、肩車をする影がいて誰かと遊ぶ影がいて。

たくさん影自分の後ろにいて。

楽しそうに嬉しそうに忙しそうに悲しそうに苦しそうに悔しそうに、人間のように。

影たちは何かをしている。

気になって後ろを覗いてみてもそこには誰もいない。

誰も。

いない。

胸の奥に何かが刺さる感覚を覚える。

寂しい？

わからない。

ただ僕は延々に続く十字路を歩き続ける。

後ろを気にしつつ。

本の影

なぜ俺はこんなことをしている。

なぜ俺は続けている。

なぜ？

何のために？

何をしたくて？

ただ本を整理し続ける？

自分ではわからない、なら誰か教えてほしい、だがここには俺以外誰もいない。

直すたび、別のどこかの本棚の本が乱れ落ち崩れる。

それを俺は直す、嫌だと思っても体が自然と反応し動く、抵抗しても無駄らしい。

生物が生まれ出でた時から持ち合わせる反射的な機能のように、心が拒絶しても脳や体がそれを許さない、本能が俺の体を支配して本を整理させる。

広くはない、だが狭くはない。

小さくもなければ大きくもない。

古くもなければ新しくもない。

学校の一室にある図書室。

俺はここに閉じ込められ、日の翳らないこの場所で、本の整理をする。

させられている。

誰かが本を落としている、そのことには気づいている。

物音がして、振り向く、だが誰もいない。

誰一人も、そこにはいない。

ただ本が落ちている、だけだ。

俺はそれを元の場所に戻す、そして直す。

終わればまた見えない誰かが本を乱す。

俺はまたそれを直す。

それをひたすらに繰り返す。

鬼ごっこようだ。

自分の影とする。

捕まえられるはずのない。

苦笑した。

酷い疲れを覚える。

下を向いてため息をつく。

自分の影を見つめる。

そこには、足元には、影は無かった。

影の無い俺の足元を影が通る、上を向いて影の行った方向を見るとそこには誰もいない。

下を見る、そこには影がいて腕を動かし本を落としていく。

誰かが。

ふいに何で他人が落とした本を直さなければならぬのか、という怒りに似た感情が湧き上がってきた。目を瞑り、俺は何も知らない、そう念じながら立ち尽くす。

何分か、何十分かたって、時計の針の音が聞こえて目を開ける。

日は翳っていつていた。

自分の足元を見る。

影がいた。

図書室のドアが開いていた。

俺は図書室から出る。

振り向きそうになったのを理性で押さえつけながら。

振り向いたら、また閉じ込められそうな気がして。

迷い人

ふと、自分がどこにいるのか分からなくなった。

ここはどこだ？

俺は何でここにいる？

見たことの無いこの町に、どうやって来た？

俺はどこまで来てしまったんだ？

あたりを見回すが、自分の知っている景色は一つも無い。

遠く先に大きな赤煉瓦の塔が見える。

耳を澄ますと豆腐屋の懐かしいあのラッパの音がする。

空は茜色に染まる。

夕日を見ると無にこみ上げてくるモノがある。

それが何なのかは分からない、得体の知れない、しかし嫌じゃない。

誰もが心の奥底に持っているモノの様な気がした。

地面を見ると白い線が書かれていた。

不規則な線の押収、幾何学模様、子供たちが遊んだ跡。

乗り捨てられた三輪車、置かれたままのバケツ、スコップ、金髪の人形、水鉄砲。

自分が、長い間置き忘れてきたモノの様に見えた。

かつて自分もこういうことをしていたのだと、ふと思い出した。

いつからだったかな、おままごとが幼稚だと思ふようになったのは。

木造の家屋、平屋。

木の電信柱、大きな土管の様な赤ポスト。

ここは、忘れてしまったモノ、置き忘れてモノ、失くしてしまつたモノで溢れている。

茜色の世界、ここには俺しかないのか？

それとも……。

首が疲れて目線を下げると、地面には自分の影以外に無数の影が蠢いていた。

半透明で平面の黒い影が。

形はバラバラだった。

子供の影だったり、大人の影だったり、さっきの地面には数人の子供の影が楽しそうに遊んでいた。

走り回る三輪車の影。

地面に絵を描く、おままごとをする、人形で遊ぶ、子供の影。

影は動くが、三輪車も、人形も、何一つ動いていない。

何なんだここは？

「おや」

声がした。

「珍しいね、ここに人が来るなんて」

俺の目の前に少女が立っていた。

いつの間に？ さっきまでそこには誰もいなかった。

「狐にでも化かされたのか、て顔だね」

少女はくすくすと笑った。

「安心しな、別にとって食おうとは思ってらんよ。ただ少し世間話がしたくてね」

少女は近くにあったベンチに腰掛けた。

バス停だった。

やはりそこにもさっきまでバス停はなかった。

突然、現れたのだ。

俺も少女に習ってベンチに座った。

「ここが、どこだか分かるかね」

分からない、どこなんだここは？

「そうだろうね、ここを知っているのはワタシぐらいさね」

なら教えて欲しいここはどこなんだ？

「ここは忘れられたモノが来る場所」

忘れられたモノ？

「そう、忘れられたモノが来る場所。形あるものはいつかは滅びる人であれ、動物であれ、物であれ、この世に形を持って産れてきたモノは必ず消えてなくなる、そしてここに来る。

まあ、ここに来るのは人や動物じゃなくて物だ。ねえ、物が死ぬってどういうことだと思う？」

物が死ぬ時：それは、壊れてしまったということか、茶碗で例えるなら割れたとか？

「そうだね、それが普通の考えだ。でも、本当の意味での死ではない、物にとって死ぬってことは忘れられるってことだよ」
「どうということだ？」

「壊れてもね、人の心には思い出として物は生き続ける、人と同じように。」

でもね、それでもいずれは忘れられる、元々物には命はないからね、人の心に宿った物は忘れられるとここに来る。ここはね物の死後の世界なんだよ。

今見ているこの影たちも、さっきまで遊んでいた子供の影も、みんな物の記憶を再生しているだけなんだよ」

再生しているだけ、つまり映画のような物、ということか？
物の記憶というフィルムをこの世界という映写機が？

「上手い例えだね、大方あってるけどでも違う。この世界の話は、本質は人の作り出した言葉では語ることはできない、ワタシの言っていることだって結局は的外れの様なものだしね」

長い沈黙が続く、俺は、少女の言っていることを思い返した、何度も、何度も。

「さて、もう帰る時間だよ」

そういうと少女は俺の腕を掴む。

目の前にはバスが止まっていた。

「乗っているとだんだん眠くなってくる、逆らわずに睡魔に身を任せるといい、君のいるべき場所へ帰れるから」

バスは俺を乗せて走り出した。

少女は少しずつ小さくなっていき、俺は少しずつ眠くなってきた。
結局、あの少女は何者だったのだろう。

もしかしたら、あの少女も物の記憶なのだろうか？

それを確かめ様にも少女はもういない、それにもう睡魔には逆らえないみたいだ。

少しずつ瞼を閉じながら少女に別れを告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5194e/>

日の翳らない影の世界

2010年10月14日20時09分発行